

変異株 世界で続出

免疫効きにくくなる方向か

系統名	初確認	特徴
BA.5	2022年2月 南アフリカ	世界で検出されるウイルスの主流。日本でも9割
BA.4.6	5月 米国	米圏を中心に増加傾向
BA.2.75	6月 インド	インドで急増
BQ.1	9月 ナイジェリア	英国やフランスなど欧州で増加傾向
XBB	9月 シンガポール	異なる二つの変異株の遺伝子が混ざった「組み換え体」

世界各地でオミクロン株の派生系統が確認されている。国立感染症研究所（東京）によると、9月に新しく見つかった2種類をはじめ、今後の広がりが見込まれる派生系統がいくつもある状況だという。

同研究所が21日に評価をまとめた。9月にナイジェリアで見つかった「BQ.1」は、英国やフランスといたった欧州を中心に増えている。ワクチンや感染で得た免疫の一部が効きにくいとみられる変異を獲得。英国では感染者のうちBQ.1などが18%だ。

9月にシンガポールで確認されたのは、二つの変異株の遺伝子が混ざった「組み換え体」と呼ばれる「XBB」。同国では感染者の半数を占め、バン格拉デシュでも増加傾向だ。ほかの系統よりも広がりやすい可能性が指摘されている。

いずれも日本でも確認され、今月17日時点でBQ.1とその派生系統が検疫と国内で計17人、XBBは計7人。今後増えるおそれがあるという。

ほかに、5月に米国で見つかった「BA.4.6」は北米を中心に増加傾向で、米国では現在11%を占める。6月にインドで見つかった「BA.2.75」はBA.5からの置き換わりが一時的に進んだ。いずれも国内で100人以上の感染者が見つかっているが、BA.5が主流の状況は変わっていない。

これらのオミクロン株の派生系統は重症度が上がったという明確な報告はない。ただ、細胞への感染しやすさよりも、既存の免疫が効きにくくなる方向への変異が進んだとみられる。

中国・北京などのグループがオミクロン株の派生系統を調べたところ、BQ.1やXBBなどはBA.5と比べて細胞への結合力が必ずしも高くなかった。一方、感染を防ぐ中和抗体から逃れやすくなっているものがあつた。グループが10月に、専門家の査読

前の論文として発表した。免疫を逃れやすい変異株が複数流行しつつあるため、今後は、各国・地域のワクチン接種や自然感染の状況によって異なるものが流行するようになるかもしれないと厚労省の専門家組織も見解をまとめている。

座長の脇田隆字・国立感染症研究所長は26日の会見で「シンガポールでXBBが主流なのは感染伝播力が高いからではない。国内でもより免疫を逃れやすいものが入ると、それが主流になるのではないかと話した。（市野塊、野口憲太）

国内の新規感染 前週比で横ばい

厚生労働省に新型コロナウイルス対策を助言する専門家組織は26日の会合で、直近1週間の全国の新規感染者数は前週比0.96倍となり、ほぼ横ばいだったとの分析を明らかにした。先週は8週間ぶりに増加に転じていた。

前週に比べ10道県で増加した。最も高いのは香川県と愛媛県の1.20倍で、岩手県が1.16倍、兵庫県が1.15倍と続く。東京都は0.94倍、大阪府は0.88倍だった。

座長の脇田隆字・国立感染症研究所長は、8〜10日の連休の影響で一時的に感染者が増えていたとの見方を示し、「現在は免疫が落ち、接触が増えると感染者が増加する状況にある。年末に向けて、接触機会がとれただけ増えていくか注意が必要」と話した。コロナとの同時流行が懸念される季節性インフルエンザについては、国内ではまだ大きな流行は見られないとした。

■新たな変異株（国立感染症研究所から、21日時点）